

満月のセレンディピティ（巻頭エッセイ）

著者	清水 学
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	243
ページ	1-1
発行年	2015-12
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003048

清水 学

満月のセレンディピティ

いうまでもなく今日のスリランカにとって最も重要な課題は、長期にわたる苦しい内戦の一応の終結の後、如何にして国民統合の基盤を強固にし、新たな発展の途を探るかということであろう。私は二〇一五年七月中旬に久しぶりにスリランカの南西地域を旅行しつつ、グローバル化の進展と国民国家の統合原理の關係に思いをめぐらしていた。多様なエスニック集団・宗派集団を包み込むような独自のアイデンティティはないであろうか。

一八世紀を生きたイギリスの政治家（ホイッグ党）で、美術史家、作家の顔を持つホレス・ウォルポールという人物がいる。ゴシック小説『オトラント城奇譚』の作者として知られる。彼は一七五四年に、『セレンディップの三人の王子』という童話にちなんでセレンディピティ（serendipity）という新語を生み出して周りに自慢した。「セレンディップ」はスリランカを指すペルシャ語「サランディープ」に由来する。

三人の王子たちは旅の途中、いつも意外な出来事と遭遇し、彼らの聡明さによって、彼らもともと探していなかった何かを発見するという冒険談である。セレンディピティには「偶発力」とか「兆候的知」のような苦労した訳があるが、「思わぬものを偶然に見出す能力」である。この国の国民統合についての私のセレンディピティを刺激したのは、カタラガマ神殿、溜池灌漑、満月公休日であった。

カタラガマ神殿は孔雀の姿をしたムルガン

（シヴァ神の長男）を祀ったものであるが、大きな宗教混合現象を生んでおり、仏教・イスラーム・ヒンドゥー教徒も巡礼に訪れている。同時に仏教を含む宗教的原理主義の対立激化も無視できない別の現実が並行している。

スリランカの溜池灌漑は一三世紀頃まで世界でも最先端の技術を誇っていた。四世紀に中国の僧法顕はその技術を中国に伝えた。空海は唐でそれを学び、現存する日本最大の灌漑用溜池である香川県の満濃池の修理に応用した。スリランカと日本を結ぶ歴史の糸でもある。

満月公休日は特に興味深い。満月を公休日としている国は世界中でおそらくスリランカだけであろう。生活のリズムのなかに月の運行も組み入れた太陰太陽暦である。潮の満ち干と月の重力が関係していることはよく知られているが、人間の身体の八割が水分であるとすれば、人体のリズムもその影響を受けなければならない。南アジアの伝統医学であるアーユルヴェーダは人体を宇宙の一部として理解する哲学に支えられている。満月公休制が仏教復興運動と関連していたにしても特定の宗教の枠を超えた意味を持っている。日本も明治五年まで太陰暦が人々の生活を規定していたが、それは自然のリズムに身を寄せ、環境にも優しい発想法である。独立後に導入されたスリランカの満月公休制が一見「世界の大勢」に反するようにみえても、グローバル化の否定面をチェックし、独自のアイデンティティを保持する精神的拠り所のひとつとなりうるのではないかと思われるのである。

しみず まなぶ／(有)ユーラシア・コンサルタント代表取締役

前帝京大学教授。最近の主な著作は、「論考 中国と湾岸を結ぶ南アジア——パキスタン・アフガニスタンの動向と関連させて——」（『中東レビュー』2015年3月号）、共編著『（新版）南アジアを知る事典』2012年平凡社など。